

おんどくさん  
恩徳讃 [混声四部合唱版]

■ 楽曲データ

歌詞：親鸞聖人御和讃

楽曲：清水脩 作曲

発表：浄土真宗本願寺派 1952年

初演：「明如上人50回忌法要・学生法要」 1952年4月17日

初出：『BUKKYO SANKA』 佛教讃歌刊行普及會 1952年

管理番号：M1456

■ 創作の経緯

戦後まもなく「新しい仏教讃歌を」との趣旨で、西本願寺内に「佛教讃歌刊行普及會」が設立され、1952年、同団体より同声二部合唱版（二長調）とともに発表。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第1巻収録

底資料：『BUKKYO SANKA』 佛教讃歌刊行普及會 1952年

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

□ 仏教讃歌を歌う心構え——恩徳讃を教材として

仏教讃歌はその用途や形態にかかわらず、つねに仏徳讃嘆の心の表現として歌われるべきものであり、また宗教的情操を育て、宗教的なよろこびを歌い上げるものであります。

声を合わせて同じ歌を歌うという行為は、それ自体、「協調」「共感」「一体感」を育むものといえます。とりわけ、仏教讃歌は、宗教的情操を養うとともに、よろこびを共感する空間を創り出します。その意味では、みんなが声を合わせて明るい声で歌うことが、非常に大切なポイントになってきます。

メロディーのあちこちに「こぶし」をつけたり、歌い始めの声をずり上げたり、音をとらずに（音の高さを決めずに）やみくもに歌い始めたり、各自が勝手な高さ（調子）で歌ったり、歌いにくい高さの部分だけオクターヴ下げたりすることは、ぜひ避けたいものです。

仏婦会員またはそのご家族で、オルガンなど鍵盤楽器に慣れた方のご協力を得るか、あるいは本願寺出版社発行の音源（CDなど）を活用して、前奏に続いて全員がそろって歌い始めるようにしましょう。そうすれば、各種の集いで感

動的な仏教讃歌が歌われ、聴かれる日も近いはずです。

#### □ 恩徳讃の歌い方

この曲は、戦後の日本の代表的な作曲家の一人、清水脩さんによって、和風の明るい旋律をもったピアノ伴奏による讃歌として作曲されました。混声合唱譜を用いた、荘重なオルガン演奏も可能です。

出典は、親鸞聖人が晩年に、自らのお味わいをお詠みになった『正像末和讃』「三時讃」の最後の一首（結讃）です。カラオケが氾濫する世相ですが、詞の意味を考えず、その語感（言葉の響き）を無視した無表情の歌唱が感動をよぶわけがありません。

- ① 詞を何度も声に出して読み
- ② その内容をよく味わい、
- ③ 明るく暖かい母音と深く安定した呼吸を心がけ、
- ④ 無理のないダイナミクス（強弱）で、
- ⑤ 聖人の情熱をまのあたりに聴くつもりで、歌い上げて下さい。

解説執筆：仏教音楽研究所 [現・総合研究所（仏教音楽・儀礼研究室）]

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No.2（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第127号収録）を加筆・修正の上、転載。

Copyright : Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.